

はじめに

書くことは難しい。「薔薇」や「倦怠」などの文字を、容易に読むことができて、正しくかける人は少ない。文字としての性質は異なるが、かな文字においても、事情は同じで、読めても書けない、という発達障害児は多い。「読み」と「書き」は、異なる能力基盤で習得され、異なるメカニズムで運用されている精神活動である。そのことを良く示すのが、脳損傷により言語障害を来たした、後天性障害の事例である。読み・書き、それぞれ一方のみが出来なくなる、という純粹障害例が、古くから知られている。◆しかし一方、読みと書きは、密接に関わり、相互に高め合いながら、その歩を進めて行くことも、明らかにされている。幼児は、ひらがなを読み始める前に、「スクリブル」と呼ばれる文字様のなぐり書きを、多く産生することがあるが、大人の行為を模したこの活動が、文字形態の認知や、意味伝達としての記号概念の形成に、大きく寄与している。◆文字は、読みから書きへ、という流れをイメージとして持ちやすいが、例えば文字の起源を考えてみても、伝達のために何かを記すという行為が、まず始めに在った筈であり、本来、人は、書く(描く)ことを志向する存在だと言える。だからこそ、子どもは「お絵かき」やら「おてがみ」が大好きで、じつに生き生きと取り組むが、そこに普遍的な記号性を求められ、それが上手く達成できないと、その活動を途端に嫌悪してしまうことも多い。皆と同じような車の絵や、正しい形の「あ」の字が書けないことが、時には大きな心理的負担となる。できることならば、無理なく、楽しく書字学習を進めたいとは思っているのだが、構成能力が未熟な子どもにとって、整った字を書くことはひどく大変で、音韻認識が不完全な子どもは、表記の誤りがいつまでたっても収まらない。◆書くことは、様々な認知能力や活動意欲に支えられた「運動技能」であり、発音などと同様に、その習熟には、長い繰り返しの練習が必要である。書字習得に様々な問題を抱えている障害児にとっては、根気強く、そしてやはり楽しく書字学習を続けて行ける療育環境が、もっとも大切なのかも知れない。